

## カナダにおける日本語教育（事前の聞き取り調査並びに出張報告）

谷口龍子(2011.3.29)

出張に先立ち、2010年7月22日東京に於いて、ビクトリア大学の野呂博子准教授に、カナダの大学における日本語教育の概要を伺った。その後、9月19日から27日まで現地に赴き、4校（ブリティッシュ・コロンビア大学、アルバータ大学、トロント大学、モントリオール大学）を訪問、担当教員に聞き取り調査を行った。また、国際交流基金トロント日本文化会館の副所長や日本語上級専門家にカナダ全体の中等・高等教育の現状について伺う機会も得た。

### 日程

7月22日（木）場所：品川東横イン 野呂博子氏（ビクトリア大学太平洋アジア学科准教授）と面談、聞き取り調査。

9月19日（日）出発 AC4 成田発→バンクーバー着

9月20日（月）

午前：ブリティッシュ・コロンビア大学訪問

レベッカ・チャウ氏（アジア研究学科日本語プログラム・コーディネーター）と面談、聞き取り調査。

(AC238 バンクーバー発→エドモントン着)

午後：アルバータ大学訪問

下野（かばた）香織氏（アルバータ大学東アジア学科准教授、高円宮日本語教育・研究センター所長）及び永富あゆみ氏（国際交流基金日本語上級専門家）と面談、聞き取り調査。

9月21日（火）移動日（AC243 エドモントン発→バンクーバー着）

9月22日（水）移動日（AC116 バンクーバー発→トロント着）

9月23日（木）国際交流基金トロント日本文化センター訪問、副所長藤居真美氏と面談、図書館見学、主任司書リリーフェルトまり子氏と面談。

9月24日（金）

午前：トロント大学訪問、

小室リー郁子氏（人文学部東アジア学科専任講師 (Senior Lecturer)）と面談、聞き取り調査。

(トロント発→モントリオール着)

午後：モントリオール大学訪問

金谷武洋氏（東アジア研究所日本語科科長）と面談、聞き取り調査。

その後、日本語の授業見学。

9月25日（土）国際交流基金トロント日本文化センター訪問、  
副所長藤居真美氏に聞き取り調査。

9月26日（日）出発 AC1 トロント発

9月27日（月）帰国 成田着

## ビクトリア大学 University of Victoria

野呂博子氏（ビクトリア大学太平洋アジア学科准教授）と面談（於品川東横イン）

カナダでは、地域研究あるいは文化研究の一環として日本語教育が行われており、日本語の学習がその背景となる文化や歴史と切り離せないものとして考えられている。

ビクトリア大学においても、太平洋アジア学科という地域研究の中で、日本語学習が位置づけられる。地域研究には言葉の知識が必要であるという考えで語学教育が行われているのである。

太平洋アジア学科では、日本語、中国語あるいはインドネシア語のいずれかを学び、副専攻として日本研究を履修することができる。

太平洋アジア学科の常勤講師は6名でそのうち4名が日本人である。教員は随時担当科目を変えている。

日本語の人気は高く、新入生300人のうち日本語の履修者が150名以上に上る。

1,2年次の語学学習は必修で、日本語は『初級日本語 げんき』（ジャパン・タイムズ）をテキストとして使用している。学習者はおおむね文法の知識を学ぶことが苦手なようだ。

在学中は、夏の短期留学、半年、一年間のコースで、日本の大学（同志社大学、甲南大学、成蹊大学、青山学院大学など）に送り出している。

学生は卒業後、ジェット・プログラムで日本へ行く者が多いが、契約を終了して帰国後の受け皿がないことが課題である。

大学院は修士課程に日本語関連のコースがあり、理論、リサーチと方法論に関する科目の履修が必修である。近年の修士論文のテーマは「日本における英語教育」「安部公房、砂の女」「神道とエコロジー」などがある。

Rebecca Chau Ph.D. (ブリティッシュ・コロンビア大学アジア研究科日本語プログラムコーディネーター) (於 Rebecca Chau 氏研究室)

数年前までは日本語専攻があったが、現在は科目の履修が多角化しており、専攻はアジア言語・文化(日本語)となっている。

学生数は 700 名程度で(正規のプログラムにおいては、学生の年間登録数が約 1,400)、そのほかにサマーコースの履修者が 200 名程度いる。

日本語学習の目的は、言語を通して異なる世界観を得、異なる文化を知ることである。

日本語の総合コースとして、初級では『げんき I、II』、中級では、マグローン他の『Intermediate Japanese』を使用、上級では、reading, writing, conversation の科目に分かれる (reading, writing, conversation といったスキル別科目も開講されていれば、ビジネス、文学、新聞、オーラル・コミュニケーションなど、内容中心の科目も開講されている)。

北米においては、一般的に初級レベルの教科書『げんき I、II』を 2 年かけて終了するところが多いが、本学では、一般の科目(週四時間)のほかに、集中講座(週八時間)も開講されており、1 年間(前期 13 週、後期 14 週)で初級レベルを終了することができる。

在学中の日本留学は、強く勧めているが、強制ではない。留学期間は 1 年で、一般的に、2 年次、または 3 年次に Go Global 事務を通して募集、GPA、推薦状と面接で選考する。帰国後は 3・4 年生の授業を履修し、おおむねクラスの活性化に役立っている。(交流協定校: 東京大学、東京外国語大学、東京農業大学、一橋大学、早稲田大学、慶応義塾大学、上智大学、青山学院大学、大阪大学、立命館大学、同志社大学、関西学院大学、立命館太平洋大学)

卒業後の進路は、外交官、銀行、教師、観光など、さまざまであるが、ダブルメジャーの学生が比較的就職に有利で、同窓会組織も就職支援に一役かっている。履修生は実学目的ではなく、言葉や文化に興味を持つ者が多いことから、卒業後は日本へ行きたがる者が多い。

大学院の修士課程は 2 年、博士課程(Ph.D)は 3 年で修了する。2010 年度のアジア研究(Asian Studies)の修士課程、博士課程の学生はそれぞれ 8 名と 15 名ほどで、専門は、現代文学、古典文学、思想、歴史などである。博士号取得者は毎年輩出され、卒業後はアメリカ、アジアなどの大学教員となる者が数多くいる。

東京外国語大学に対して、教員間の交流や交換留学生の受け入れ増員を希望

している。

## **アルバータ大学** University of Alberta

かばた  
下野香織氏（アルバータ大学文学部東アジア学科准教授 高円宮日本教育・研究センター所長）（於高円宮日本教育・研究センター会議室）

日本語教育は **Language and Literature** の中に組み込まれており、2010 年度の 1 年次の日本語履修者は 240 名、2 年次は 80 名。昨年度は卒業時で 15 名であった。日本語の授業は前後期合わせて 6 単位である。

日本語プログラムの内容は、コンテンツ重視であるが、学生は近年、スキルに興味を持ち、数年前から **translation program** も開始されている。

必修科目は、1,2 年次に週 4 時間の総合コースに加えてラボがある。2 年の後半から文法科目が選択可能となり、4 年次から専門が分かれる。また、3 年次までに漢字を 800 字の学習が課せられている。

言語学専門の日本人教員は、3 名おり、そのほかにアメリカ、ニュージーランド国籍の教員が在籍している。

教科書は、1,2 年次に『なかま』（畑佐由紀子他著）、中級では、『**Intermediate Japanese**』（マグローイン他著）を使用している。

学生は、卒業後、**JET** プログラムで日本へ行く者が多い。

学生の母語が異なることから、授業中は、漢字を十分に指導できないことがかつての課題であったが、現在はオンラインの導入により解決されている。

大学院は、92 年に 2 年間の修士課程が設立された。ここ 5 年間の修士号取得者の専門は、言語学が 6 名、文学が 1 名であり、そのうち、4 名が母校で教えている。（フルタイム 2 名、非常勤 2 名）、また 1 人はシンガポールで博士号を取得、もう一人は文科省のリサーチ・フェローとなっている。

在学中は、千葉大学、ICU、上智大学、明治大学、北海道大学、静岡大学に 3 年次終了後に各 1 人ずつ留学している。選考にあたっては、**education abroad** 事務局が **GPA (Grade Point Average)** などを選考する。

日本語教育を目指す学生たちに、東京外国語大学の修士課程で日本語教育学を学ばせたいとしている。

また、アルバータ大学には、日本から **TOFEL530** 以上の学生を年 8,000 ドルで

留学させるシステムもあるので東京外国語大学の学生にもぜひ活用してほしいということである。



高円宮日本語教育センター



下野先生（左）と永富先生

#### 高円宮日本教育・研究センター

1997年に Centre for the Teaching of Japanese Language and Culture として設立。長年アルバータ大学と親交の深かった故高円宮憲仁親王殿下に因み、2004年6月10日に高円宮日本教育・研究センターとして正式に改称された。センターは、文学部に属するが、施設は教養学部東アジア学科内にあり、学部生・大学院生向けのプログラムと並行して、専門能力開発プログラムにも重点を置いている。現時点では、文学部内外の教授6名および教育学部教授1名の計7名がセンターに携わっている。

同センターでは、これまでに TAKO プロジェクト（Teaching Assistance Kaleidoscope On-line Project）というコンピューター支援言語学習企画を通じて学生が個人で教材を使って学習ができるようなレッスン・モジュールを作り出す取り組みを行うなど、コンピューターを使用した教育、研究の開発にも取り組んでいる。

また、同センターの運営により、毎年、立命館大学のサマーコースに学生を10名余り参加させている。

#### 国際交流基金トロント日本文化センター

藤居真美氏（トロント日本文化センター副所長）（9月25日トロント日本文化センターに於いて面談）

永富あゆみ氏（国際交流基金日本語上級専門家）（9月20日アルバータ大学高円宮日本教育・研究センターに於いて面談）

日本語教育に関するカナダ全体の状況を伺った。  
 カナダは、地域により日本語学習者の状況が大きく異なる。西側では特に初中等教育において日本語教育が盛んであり、東側では、特に高等教育や民間の日本語学校における日本語教育が盛んであり、継承語としての日本語教育も存在する。西側のブリティッシュ・コロンビア州はカナダにおける日本語学習者の半数以上を占めており、継承語教育も盛んである。  
 日本語能力試験は、バンクーバー、トロント、エドモントンの3会場で行われており、近年の受験者数は微増している。

日本語能力試験 応募者数(平成20年度,平成21年度) (単位:人)

年度	バンクーバー会場 (キャピラノ大学)		トロント会場 (ヨーク大学)		エドモントン会場 (アルバータ大学)		合計	
	H20	H21	H20	H21	H20	H21	H20	H21
1級	102	111	56	97	15	11	173	219
2級	132	139	140	146	25	25	297	310
3級	112	126	141	158	26	25	279	309
4級	79	81	93	122	77	55	249	258
合計	425	457	430	523	143	116	998	1096

アルバータ州教育省は、第二言語教育に力を入れており、ドイツ、ウクライナ、中国、スペイン、日本から言語アドバイザーを招へいしている。日本語の場合、2001年から国際交流基金の派遣専門家が初中等教育用の日本語教育指導要領開発を支援している。現在、高校1年次から始める3年カリキュラム、中学からの6年、小学校からの12年の3つが存在し、高校〔18〕、中学〔2〕、小学校〔2〕、継承日本語教育を主とする機関〔5〕で日本語・日本文化が教えられている。また、12年カリキュラムも改編されている。1995年には、日本語カリキュラムのスタンダードが作成されている。

また、トロントには、2010年で60周年を迎えた民間のトロント日本語学校があり、外国語教育として日本語を教えるばかりではなく、日本人と国際結婚をしたカナダ人や日系人の子弟に対する継承語教育も行っている。日系5世まで存在し、親が子供の日本語学習に力を入れているという。

**トロント大学** University of Toronto

小室リー郁子氏 (トロント大学人文学部東アジア学科専任講師 (Senior Lecturer)) (於トロント大学小室氏研究室)

人文学部東アジア学科では、言語以外に、歴史、宗教、哲学、文学などのコースがあり、これらと言語のコースの組み合わせで東アジア研究の major あるいは specialist としての学位が取得できる。全体の学生数 1000 人程度のうち、約 350 人が日本語を学習している。

初級から中級レベルは、小室リー郁子先生著『EAS 120Y1Y Modern Standard Japanese I』などシリーズのオリジナル教材が使われている。学習者のタスクを中心として 4 技能を高める目的で作成されたものだが、語彙の選択や出題方法がよく練られ、非漢字圏にも配慮して漢字学習を随所に取り入れている優れた教材である。

大学院には、現代文学、歴史、プレ・モダン、映画研究が専門の教員がおり、近年は、日本の漫画、江戸文学や靖国神社について研究する学生もいる。

トロント大学人文学部は、2010 年から 5 カ年計画で、東アジア学科を含む 6 学科やセンター(イタリア学科、スラヴ学科、ドイツ学科、スペイン・ポルトガル学科、比較文学センター)を統廃合し、新たに School of Languages and Literatures (SLL) を設立するという計画が挙がっていた。言語と文学の教員を SLL に移籍させ、それ以外を専門とする教官は他の学科に分散されることになっていたが、関係者との話し合いにより、この計画は白紙に戻されることになった。言語と言語以外の研究対象を分けず総括的に扱うことの重要性が再認識された結果であろうと小室氏は述べている。



トロント大学図書館

**モントリオール大学** Université de Montréal

金谷武洋（モントリオール大学東アジア研究所日本語科科长）（於東アジア研究所内）

当該大学の学生数は2008年秋現在で4万人近くにのぼり、カナダで2番目の規模を誇る。教授・研究者は2008年現在2千名余りである。

東アジア研究科が属する東アジア研究センターは1976年に設立された。現在、東アジアにおける言語、文学、映画学、歴史学、哲学、経済学、人類学、コミュニケーション学の専門家が20名以上在籍している。東アジア専攻、日本語文化専攻、中国言語文化専攻、ベトナム言語文化専攻の他、東アジア研究と考古学、地理学、歴史学のいずれかとの二重専攻も可能である。日本語文化専攻の場合、日本語セクションから12単位、文化セクション（経済等も含む）から3単位を選択して取ることが要求される。日本語初級・中級の科目は各6単位、日本語上級とその他の科目は各3単位である。東アジア専攻の場合、日本語または中国語の科目を36単位、両言語共通科目から24単位を履修する必要がある。

学生は、6,7割がフランス系カナダ人であり、アジア系の学習者が多いカナダの他の教育機関とは状況が異なり、漢字学習に時間がかかることや、実際の日本語に触れる機会が少ないといった問題がある。

日本語の授業は、大変人気があるが、予算の都合上、クラスが定員制となっているため、希望しても日本語の授業が受けられないことがある。

日本留学の希望者も多く、留学した学生は、日本人の親切さや礼儀正しさに触れて、より日本好きになる者が多いという。また、留学による口頭表現能力の向上が、他の学生にも良い影響を与えている。

日本語学科科長である金谷武洋氏は、文法学者三上章の評伝等の著作が多く、主語などの品詞にこだわるフランス系カナダ人に対する日本語教育に三上章の文法を取り入れている。



日本語の授業風景



村上先生の日本語の授業



金谷武洋先生

### 考察

言語学習が、その背景となる文化や歴史と切り離しては考えられないということは自明の理である。したがって、カナダにおいて、地域研究あるいは文化研究の一環として日本語教育が位置づけられているカリキュラムの在り方は最も理想的な形態であると思われる。それらを鑑みずにトロント大学の学部改編計画のような合理化（おそらく **budget** の対策であろうが）を進めようとすることは、結果として学術研究の狭小化、総合的な質の低下を招く恐れがあることは否めない。

重要なことは、学生が、興味からさらなる興味へとより深い知識や思索が得られるように分野に囚われず多様な科目を履修できるようなフレキシビリティを持った科目履修のしくみを持つことであると思う。